

この度、「トーゴの教育を支援するための日本のボランティア・プログラム 2014」を開始されるにあたり、一言申し上げる機会を頂きました。私は大学院で開発途上国における教育について研究しています。これまで 2 度トーゴを訪問し、NGO や教育省でインターンを行いました。その経験をふまえてトーゴの教育の現状をご紹介します、本プログラムの意義について考えてみたいと思います。

教育は今、世界の関心を集めるトピックの一つです。すべての子どもへ小学校教育を普及させることは、国連を中心として定められた「ミレニアム開発目標」の中にも掲げられています。現在では、小学校に行けるだけでなくきちんと卒業でき、中学校にも進学できることなどを目指す流れに移行しつつあり、多くの人々の努力によって子どもたちを取り巻く教育環境は著しく改善されていますが、今後も引き続き支援が求められています。

トーゴの就学率は小学校 130%¹、中学校 68%、高校 36%です。また、物資の不足も深刻で、例えば教科書は国語が 2.1 人に 1 冊、算数が 3.3 人に 1 冊の割合でしか行き渡っていません²。日本では就学率はほぼ 100%ですし、小学校から大学まで生徒一人一人が自分専用の教科書で勉強できることがあたりまえです。トーゴでは依然として子どもたちが学び続けることは困難で、せっかく小学校に入ることができても退学したり上の学校に進学できなかったりと、たくさんの課題を抱えています。

私がトーゴに行って驚いたのは、本屋がなかなか見つからないということでした。学校現場に限らず国全体で本というものが貴重な存在だという印象を受けました。私は中学校に図書館を建設するプロジェクトに参加しましたが、主には教科書を保管したいとのことで、そこで言われている「図書館」という言葉が指していたのは日本にあるような小説や専門書を借りる場という考えとはかなり異なるようでした。一方で、本が手に入りにくい代わりに先生が学校の黒板に丁寧に板書し、生徒たちはしっかりノートに写す、といった工夫も行われています。帰宅後も勉強をする時間のある子どもたちが近所で集まってお互いに教え合っているような、熱意あふれる風景もよく見かけました。

ある研究では、小学校において図書館の蔵書が増加すると退学率が改善されたという結果が報告されています³。また、都市に比べて地方はより困難に直面しているという指摘⁴もあります。これらをふまえると、人里離れた地域に重点を置いて学校に図書を寄贈するというプロジェクトは大変意義のある試みだと言えるでしょう。

このプロジェクトによって日本とトーゴの友好関係が一層深まり、トーゴの子どもたちが質の高い教育を受け、自ら将来を切り開いていくきっかけとなることを願います。

¹小学校の就学率が 100%を超えているのは、就学年齢を過ぎた児童も計算に入っていることによる(学校在籍者数/就学年齢人口)。

²UNICEF 発表データ。数値は 2011 年のもの。

³カンボジアにおける研究で、蔵書数が 1 増加すると退学率が 6.0%から 3.3%へ減少する結果となった。(三宅隆史.(2010). 初等教育の内部効率に対する学校図書館活動のインパクト--カンボジアの事例. *国際教育協力論集*, 13(1), 57-68.)

⁴UNDP, (2013), The Millennium Development Goals Report 2013